

「奉仕のための練達」——校訓の翻訳をめぐる

辻 学

序 問題設定

関西学院がスクール・モットー（校訓）としている“Mastery for Service”は、よく知られているように元来は、商学部の前身である高等学部商科のカレッジ・モットーとして、高等学部の初代学部長であったC. J. L. ベーツ（後の第4代院長）が提唱したものである¹⁾。ベーツは、「Our College Motto. “Mastery for Service”」という文章を、『商光』第1号（1915=大正4年）に発表し、その中でこの校訓について解説している²⁾。関西学院の上ヶ原移転後、学院全体のスクール・モットーとしてこの言葉は用いられるようになった。

ところで、Mastery for Serviceには、ほぼその定訳のようにして、「奉仕のための練達」という訳語が付されるのが今日では常となっている。実際、

-
- 1) “Mastery for Service” 制定の経緯については、『関西学院高等商業学部二十年史』（1931=昭和6年）13頁に次のような記載がある——「学部的人格主義的教育を学生自らの脳裏に明確に意識せしむるには何か簡単なる標語、警句を選ぶのが好いと云ふので、ベーツ部長、木村教授等相計ってここにCollege Motto.として“Mastery for Service.”を、College Watch Words.として“Character” & “Efficiency”を決めた。前者はベーツ部長、後者は木村氏の考案に基くものである」。
 - 2) 『商光』は、高等学部商科会の機関誌。誌名は、新約聖書マタイ福音書5章14-16節（「爾曹は世の光なり〔……〕人々の前に爾曹の光を耀かせ」）から取られたもの。なお、ベーツのこの文章は現在、『大学案内』（教育・研究編）に原文のまま再録されている。また、その抄訳が、『関西学院七十年史』（1959=昭和34年）89-90頁に掲載されている。

Mastery for Serviceをめぐって書かれる文章のほとんど全てが、masteryを「練達」、serviceを「奉仕」と訳している。

「練達」とは、「練習の結果、その技術や芸事が入神の境地にまで達すること」（『新明解国語辞典 第五版』）であるが、この語が、英語のmasteryの意味するところを全て言い表しているわけではない。serviceもまた、一概に「奉仕」とのみ訳し得るものではなく、より広い意味合いを含んでいよう。解釈の入らない翻訳はあり得ない。したがって、「奉仕のための練達」もまた、Mastery for Serviceという句の解釈の一つに過ぎないのである。もし我々が、「奉仕のための練達」という（それ自体曖昧な響きを持つ）訳語のみによってMastery for Serviceを理解しているとすれば、この校訓が持つより広い意味合いを見逃してしまっているのかもしれない。

そこで本稿では、商学部設立50周年ならびに高等学部商科設立90周年を記念するこの機会に、校訓の邦訳として広く定着している「奉仕のための練達」が、Mastery for Serviceの訳語としてふさわしいものであるかどうかを、いくつかの資料を参照しながら歴史的・学問的に考察することにしたい。

I 訳語の登場

「奉仕のための練達」がMastery for Serviceの訳語として登場するのは、学院史の中では比較的后代のことである。文献上確認できる範囲では、1952（昭和27）年に発行された『関西学院大学概要』の表紙裏にある「Mastery for Serviceについて（表紙）」という項の中にこの訳語は初めて登場する——「マスタリーとは錬達³⁾、サーヴィスとは奉仕、つまり奉仕するために錬達するといふことである。〔……〕英語ではマスターとサーヴァントという面白い語の対照になるのであるが、仕えるために征服する、僕となるために主人となる。全人類の僕となるために、技能や知識を征服して、

3) 糸偏を用いた「練達」が、1970年以降は多く用いられるようになったけれども、そもそもは金偏を用いて「錬達」と記されていた。『大学要覧』中の説明では、1991年版まで「錬」の字が用いられている。なお以下では、引用以外では「練達」と表記する。

その主人となるということである」⁴⁾。この『概要』は、上記の1952（昭和27）年度に発行が始まったので（1953年度版からは『関西学院大学要覧』と改称）⁵⁾、この頃から「奉仕のための練達」という訳語は使われ出したと考えられる。

この推測を支持するのは、1952年以前、また、1952年直後に出された種々の印刷物を見ても、「奉仕のための練達」という語がそれ以前に学内で用いられていたことを窺わせる記述が全く見られないという事実である。例えば、寿岳文章（当時文学部教授）は、「学院の標語Mastery for Service」（『関西学院宗教活動』1951年）の中でMastery for Serviceについて説明をしているが、その中には問題の訳語は全く見られない——「ベーツ先生の求めているのは〔……〕奉仕のための自己完成なのである」⁶⁾。『関西学院新聞』の1949年9月10日号（第241号）には、別の訳語すら見られる——「なおその〔院章の〕下に書かれている横文字は云わずと知れたMASTORY(ママ) FOR SERVICE（奉仕の精神）である」。

戦前の文献にも、Mastery for Serviceに触れたものは少なくないが、このスクール・モットーに訳語を付したものは見当たらない。おそらくMastery for Serviceは、英語のまま広く用いられたのであり、これを日本語で言い換える必要を見出さなかったのに違いない。戦後、おそらくは1950年代に入って初めて、「奉仕のための練達」という言い換えが行われるようにな

-
- 4) この説明は、その後も少しずつ表現を変えつつ『大学要覧』の表紙裏に掲載され続けたが、1992年度に『大学要覧』の版型を大きくした際、全文削除された。1989年度から『大学案内 教育・研究編』が出されるようになり、その中に「建学の精神とスクール・モットー」という文章（小林信雄〔当時神学部教授〕）の文章が載るようになったためと推測される（小林の文章は、2002年度版に掲載されているものと同じ）。
- 5) 1952（昭和27）年度の「学事報告」（大石兵太郎）中に、「大学要覧（プレティン）発行——〔……〕五月初旬昭和二十七年分を創刊四千五百部」との記載がある。
- 6) Mastery for Serviceについて論じながら、問題の訳語を用いない例は他にも見られるので（例、原田修一「卒業生におくることば」、関西学院大学経済学部『卒業記念誌1952』、1952年）、「奉仕のための練達」が用いられていないのは、寿岳の個人的な好みによるのではなく、まだそのような訳が存在しなかったか、あるいは少なくとも学内に広く知られるまでになっていなかったためだと考えられよう。

ったと見られる⁷⁾。上記の『概要』は、「奉仕のための練達」という標語的な言い方でなく、「奉仕するために練達するといふこと」と述べているに過ぎない。たぶんここから「奉仕のための練達」という訳語が編み出されたのであろう。したがって、「奉仕のための練達」という訳語の誕生は、現在手に出来る史料から判断する限り、1952年だということになる。

その後この訳語は次第に学内で、Mastery for Serviceの言い換えとして用いられるようになっていったと見られる⁸⁾。「練達」を「熟達」としている例も見られるが、これは、「練達」が邦訳であると正式に決められたわけではないゆえであろう⁹⁾。特に1970年以降は、ほぼこの訳語が学内で定着したと言って良い。小寺武四郎（当時学長）は1970年に次のように書いている——「関西学院はMastery for Serviceという言葉を経験として持っている。『奉仕のための練達』と訳されている」¹⁰⁾。また、1972年に発表された次の文章などは明らかに、「奉仕のための練達」を読者が知っている前提で書かれている——「“Mastery” は単なる技術やテクニックを意味するのではない。

- 7) ここで浮かぶ疑問の一つは、戦時中はこの標語をどう扱っていたのかということである。筆者は最初、戦時中ゆえに英語を使えない事情からこの訳語が考え出されたのではないかと想像していたのだが、この想像を裏付ける史料は確認できなかった。
- 8) 学院史編纂室の記録によれば、1959年に、(株)学研から学院史資料室（当時）に対して、Mastery for Serviceの訳語に関する問い合わせがあり、「奉仕のための練達」と即答したという。この頃はすでに、「即答」できるほどにこの訳語が認知されていたわけである。もっとも他方、「人に対してサービスをつくしましょう」といった「平板」な訳語も見られる（『神戸新聞』関西学院創立七十周年記念特集、1959年11月3日）。
- 9) 「『奉仕のための熟達』（Mastery for Service）という建学のモットーを法学教育に生かそうという意欲〔……〕」（足立常夫〔当時法学部長〕「関学の法学教育と法曹教育」『法学セミナー』1968年10月号）。「表題“Mastery”は、わが学院の目標“Mastery for Service”の“Mastery”（熟達）を指し示すのである」（河村拓磨〔当時学友会会長〕「はじめに」、高等部学友会機関誌『MASTERY』第2号〔1964-5年〕）。このような例は、「練達」と「熟達」が混用されていたことを示している。また、小宮孝（当時院長）「初めに建学精神あり」（『関西学院学報』1967年10月15日号）では、「奉仕のための練成」という訳語が用いられている（『建学の精神考』第1集、関西学院キリスト教主義教育研究室、1993年、25-28頁に再録）。
- 10) 「心をむなしくして」、関西学院宗教活動委員会・宗教センター編『新入生におくることば』1970年、2頁。

『練達』は『奉仕』につながるべきであり、弱小にして罪深い人間にとって、奉仕はキリストの十字架愛によってのみ許されると聖書は教えているのである¹¹⁾。

II 提唱者自身の解釈——「自主」との関連

「奉仕のための練達」はこのように、Mastery for Serviceの訳語として1950年代以降次第に定着していったわけだが、これが、果たしてMastery for Serviceの翻訳＝解釈として適切かどうかは、考慮の余地がある。

少なくとも、このモットーを提唱したベーツ自身は、Masteryを「練達」と訳すのとはやや異なった角度でこの語を捉えていた。前述の『商光』創刊号に掲載されたベーツの文章を見ると、masteryはto be mastersの意味で理解されている——“We aim to be strong, to be masters — masters of knowledge, masters of opportunity, masters of ourselves, our desires, our ambitions, our appetites, our possessions. We will not be slaves ...” 「奴隷」(slaves)との対比で用いられていることからして、masterが「支配者、主人」の意味で解されていることは明らかであろう。もちろん、「知識」(knowledge)や「欲望」(desires)を支配することは、勉強・鍛錬を通して可能になるのだとすれば、「練達」という意味合いがそこに全く含まれていないとは言えない¹²⁾。しかし、masteryはまずもって「支配者、主人であること」という意味で理解されるべき語なのである。

1959（昭和34）年の学院創立70周年記念に来日したベーツは、「人への奉仕に生きよ 20年目に学院へ帰って」という講演を行なっているが¹³⁾、その中でベーツはmasteryをやはり「マスター」（主人）の意味で解説している

11) 楠瀬敏彦（当時経済学部教授）「Mastery for Service—学問・信仰・愛」、関西学院宗教学活動委員会『Mastery for Service—学問・信仰・愛』1972年、11頁。

12) 実際、この文章の中では、masteryとserviceがそれぞれ、self-culture（自己修養）とself-sacrifice（自己犠牲）という、人生における二つの理想に並行づけられている。したがって、masteryの中に「自己修養、自己鍛錬」の意味を読み取ることは間違いとは言えない。

13) 『神戸新聞』関西学院創立七十周年記念特集（1959年11月3日）に収録されている。

——「私どもは他のもの、他の人、他の悪い習慣の奴レイ(ママ)でなくて、セルフ・マスターにならなければならないと思います」。

興味深いのは、ベーツがmasteryを「セルフ・マスター」、すなわち自分自身の主人と言ひ換えていることである。自分自身の主人、すなわち「自主」であること、それがmasteryだと言うのだが、この「自主」は、新約聖書ヨハネ福音書8章32節から取られたもので、現在流布している翻訳(口語訳・新共同訳)では「真理はあなたがたに自由を得させるであろう」(口語訳)となっているが、漢訳聖書ではこれが「真理將使爾得自主」と訳されている¹⁴⁾。ギリシャ語のἐλευθερίαは「自由」と訳されるのが常だが、ベーツは、この独特な訳語「自主」に、Mastery for Serviceの教育的意味を見たわけである。ベーツは実際、このヨハネ福音書の言葉とのつながりでMastery for Serviceを解説していたようである。上記の学院創立70周年記念講演の中でベーツは、「真理將使爾得自主」(これをベーツは、The truth shall make you *selfmaster*と「英訳」している)とMastery for Serviceを「二つの大切なモットー」として並べ論じている。また河辺満薨(元高等部長、宗教総主事)は、ベーツの思い出として次のように記している。

「マスタリー・フォー・サービス」の説明を〔ベーツ〕先生に伺ったが、「真理は汝をして自主たらしめる。」わざわざ漢訳の聖書を取られて、「真理は我々を自主たらしめる。自主とはセルフ・マスタリーである。真理を得て自主的な人間になる。これが教育だ。学院教育である。そしてその教育の目的は奉仕である。真理……自主……奉仕、そこで「マスタリー・フォー・サービス」といわれたわけである¹⁵⁾。

したがって、masteryの最も適切な訳語は、ベーツ自身の意図に従うなら

14) この言葉は、神戸原田の森キャンパスにあった神学館の玄関に刻まれ、当時の神学部のモットーとされていた。

15) 河辺満薨「恩師ベーツ先生のことども」、関西学院宗教活動委員会編集・発行『学院を語る』1965年、10頁。

ば、「自主」ということになるだろう。

もっとも、上にも述べたように、「自主」の理想に到達するための自己修養、その結果としての練達という意味合いも、ベーツ自身排除してはいなかった。その意味合いをベーツ自身が解説している文章も残っている¹⁶⁾。また、「奉仕のための練達」という訳語が用いられるようになった当初は、この標語が「主人」と「僕」の対比になっていることが意識されていた¹⁷⁾。しかしながら、「練達」という訳語が広く定着していく過程で、masteryが「主人」という意味を持っていることは次第に忘れられていったのである。

そうだとすれば、「練達」という訳語は、masteryの持つ意味の一部を言い当てたものではあるが、この標語が持つ逆説的な意味を十分に表しているとは言えず、必ずしも適切なものとは言えないことになろう。Mastery for Serviceの味わいは、「主人」と「僕」（後述するように、むしろ「奴隷」と訳されるべき語である）の対比にあるだけに、その意味合いがうまく訳出されていない点はやはり惜まれる。

ベーツの後を受けて、第5代院長に就任した神崎驥一は、ベーツとはやや違った角度から、Mastery for Serviceと上述のヨハネ福音書との関連を捉えている。神崎によれば、真理は自由を得させる。しかし、その自由を制限し、正しく方向づけるものがMastery for Serviceだというのである——「吾が学院は教育精神の根底に於て三大綱領を有する（一）は自由主義に基く人格の養成を以て人間教育の基礎とする事、（二）は“Mastery for Service”の標語を翳して奉仕犠牲の徳力を涵養する事〔……〕。第一に人格の修養個性の発揚のためには基督教主義に基く

16) 「我が学院のモットーとする所は一方に於て修養の理想他方に於て他人に対する助力を云ひあらはす『マスター・フオア・サーヴキス』は我々が常に高らかに叫び我々を内面的に外面的に有意義なる生活に進む目標ともなるべき旗印である」（『関西学院新聞』111号=1935年4月20日）。

17) 上述の1952年度『関西学院大学概要』では、そのことにも触れてある——「英語ではマスターとサーヴァントという面白い語の対照になるのであるが、仕えるために征服する、僕となるために主人となる。全人類の僕となるために、技能や知識を征服して、その主人となるということである」。『関西学院七十年史』におけるMastery for Serviceの解説（91頁）も同様だが、こちらは『概要』を引き写したもののようである。

精神的指導訓育に力を注ぎ、特に学科の内容編成に考慮を払ひ、更に学生の自由自治を尊重して目的の達成を期して居る。然れども自由主義的教育は往々にして放縦、不規律、不節制、無責任、秩序及礼儀の無視、勤勉努力の欠乏等の如き短所弊害の伴ひ易きものであるから、学校も学生も共に自制警戒を要するものがある。故に修養練磨これ努め、進んで国家社会に対する奉仕献身の美德を養ひ、又自己の価値尊厳を自覚して熱意人格完成に精進せねばならぬ〔……〕¹⁸⁾。

Ⅲ 「サービス」が意味するもの

すぐ上に引用した神崎驥一の文章は、1937（昭和12）年に書かれたものだが、その中で、Mastery for Serviceのserviceが、「国家社会に対する奉仕献身」と理解されていることにはやはり注目せざるを得ない。

国家主義台頭という時代背景の中で、神崎がこのような解釈をしたこと自体をここで問題にするわけではない。同じ時に、この標語の提唱者であるベーツ自身もまた、神崎と同様の方向でserviceを意味づけているのである——「諸君自らの環境に打勝て！ そして国家に対し世界に対し神に対して大奉仕をなさんが為に諸君自らの学問を習得せよ!! これこそが、我が学院のモットー『マスターリー・フォア・サーヴィス』の意義であります」¹⁹⁾。

serviceの対象が何であるかを、この標語自体は示していない。ベーツ自身が『商光』の中で述べているところによれば、それは「社会」(society)、また「人類」(humanity)である。これらの概念は、「自分」(self)との対照で用いられている。「社会」という表現は、このモットーが元来、(将来ビジネスマンとなる)商科の学生に向けて語られたことと関係していよう。

しかし、その対象は時代精神によって変化する。ベーツ自身、上に述べたように、国家主義台頭の時代（1938年）には「国家・世界・神」に対する奉

18) 神崎驥一「本校教育の真諦と特色」、関西学院高等商業学校『学生便覧』1937年、11-12頁。『関西学院新聞』99号（1934年4月20日）に執筆された「学院大学の建設を語る」にも、自由を制限するMastery for Serviceという趣旨の説明が見られる。

19) ベーツ院長「新入生歓迎之辞」、『関西学院新聞』142号（1938年4月21日）。

仕、という言い方をしている²⁰⁾。また、学院創立70周年記念講演（1959年）の中では、「他の人のため、あるいは公のため、国のため、世界のため」と述べている²¹⁾。ベーツが、サービスの対象として最初は挙げていなかった「国家、国」という概念を後から用いるようになったことは興味深い。

『関西学院大学要覧』には、1971年度版から「関西学院大学の歴史と伝統」という2頁の項目が付け加えられており、その中に次のような一文が見出される——「“Mastery for Service”という言葉は、現存の資本に奉仕する奴隷的労働者の養成を意味するものだと主張する者もあるが、それはこの言葉の志向する高い理想を理解しえないところからくる曲解である。〔……〕この言葉は、いかなるイデオロギーや社会機構にも隷従しない自主的人間存在の形成を志向するものであると理解されるべきである」。この文章は、いわゆる大学紛争時における、大学の存在意義をめぐる議論を意識したものであろう。

このような論議はそもそも、serviceがその対象を明示していないところから来るものである。だが同時に、serviceという語を「奉仕」と訳していることも、「何に奉仕するのか」という議論を呼び起こす原因であるように思われる。

「奉仕」とは、「報酬を度外視して国家・社会・人のために尽くすこと」（三省堂『新明解国語辞典 第五版』）を意味する。その場合、尽くす側と尽くされる側の間には上下関係は必ずしも前提されない。

だが、Mastery for Serviceのserviceは、「主であること」の反対概念であり、僕、奴隷といった「下」の者が「上」の者に仕える、という意味を含む。したがってこの語は、masteryの対概念であり、先行するmasteryが、通常

20) ベーツが記したものではないが、『関西学院新聞』150号（1939年1月20日）に掲載された論説「百五十号に寄せて」の中にある次の文章は、校訓の解釈が時代の中で揺れ動いた様を窺わせる——「現今の如き新情勢にありては或は自由主義が否認され、あるひは個人主義が排撃せられる時、我々が年久しく学院のモットーとして来た伝統は之を如何に解釈し如何に対応すべきかは一にかゝつて新学生会長の双肩にある。我々は率先皇道精神に則り国策の線に沿ふべき時である」。

21) 前掲註13参照。

の意味での「主人」になろうとするのではないことを示す働きをしていることになる。そしてまさに、その働きこそが、このserviceの持つ決定的な役割なのである。「主である」ことを我々は求める。しかしそれは、「仕える者」であるためだ、とすることによって、「主である」ことの意味合いを根本から変える。そこにMastery for Serviceという表現の持つ衝撃力がある。

だから、「何に仕えるのか」と問うことは意味がない。「仕える」という語自体が、「主であること」を否定する働き、ないしは「主であること」の意味を根本的に変える働きをしているからである。だが、「奉仕」と訳してしまえば、その働きがわかりにくくなる。むしろ「仕える」と訳した方が、「主」との対比が明瞭になろう²²⁾。もちろんその場合、masteryを、それが「主」の意味であるとわかるように訳出することが前提となる。

ここまでの議論をまとめよう。Mastery for Serviceは、「主であること」と「仕えること」という、本来相容れない二つの概念を結びつけた標語である。我々は、主であらうとする。しかしそれは、(普通の「主人」がするような)他者を支配し、抑えつけるためにそうするのではない。我々は、「仕える者」となるために「主」になる。そのような、矛盾しているとも思われる「主」とは一体どのような存在なのか。その問いを、聞く者の心の中に起こさせる、それがこのモットーの持つ力なのである。「奉仕のための練達」という表現は、その意味合いをうまく訳出しているとは言えない。むしろ、「仕える主人」とでも訳す方が、Mastery for Serviceという語が持つ本来の力をうまく伝えるように思われる。

「主人」と「仕える者」の対比という、ここに提示した理解は、すでに述べたように、「奉仕のための練達」という訳し方が現われるようになった当初はまだ意識されていたのだが、この訳語自体がその意味合いを再現していないために、次第に忘れられていったのだと思われる。だが、Mastery for Serviceという語の直接の由来である、新約聖書マルコ福音書10章42-44節の

22) 「仕える」とは、「主君・主人などのそばに居て、不自由が無いように働く」(『新明解国語辞典 第五版』) ことだから、「主」との対比がより明確になる。

本文に照らしてみても、この理解は極めて正当なものである。そのことを最後に、この聖書箇所を積義を通して明らかにしておきたい。

IV 「主」にはなるな——イエスの命令

42 そこでイエスは彼ら〔=弟子たち〕を呼び寄せて言う、「あなたがたが知っているように、諸民族を支配している人々は諸民族を抑えつけ、その大いなる者たちが諸民族に権力を振るっている。43 だが、あなたがたの中では、そうではない。あなたがたの中で大いなる者になりたい者は、あなたがたの中で仕える者になり、44 第一の者になりたい者は、万人の奴隷になれ。（マルコ 10:42-44、私訳）

Mastery for Serviceという標語は、様々な聖書箇所との連想を引き出している。「真理將使爾得自主」（ヨハネ福音書8章32節）との結びつきについては既に述べた通りだし、「奉仕のための練達」という訳語が広まる基礎を作ったと思われる1952年度版『大学概要』では、「己が生命を救はんと思ふものはこれを失いわがために己が生命を失ふものはこれを得べし」（マタイ福音書16章25節）がMastery for Serviceと同じ精神を表している、と説明されている。

しかしこの標語はやはり、上掲のマルコ福音書10章42-44節から取られたものだと考えないわけにはいかないだろう。支配者と仕える者との対比がこの箇所ほどはっきり語られている言葉は他に見られないからである。事実、上述の『大学要覧』におけるスクール・モットーの説明でも、1971（昭和46）年度版からは、このマルコ福音書の言葉とMastery for Serviceとが「同じ精神である」と記されるようになった。

この聖書箇所を踏まえてMastery for Serviceが語られたとすれば、この標語はやはり、「主人であること」と「仕える者、奴隷であること」との対比を意識したものに他ならない。主人であるが、しかしそれは仕える者、奴隷であるためだという逆説的な主張こそが、イエスの言葉に立脚したこの標

語の生命なのである。

ただし、イエスのこの言葉を、Mastery for Serviceという標語と比較した時、そこには大きな相違があることもまた見逃せない。

それは、イエスの言葉においては、mastery＝主であることが徹底して否定的に捉えられているという点である。「諸民族²³⁾を支配していると見なされている者たち」とは、時代背景を考えれば、ローマ帝国を指すに違いない。44節における「第一の者」(πρῶτος)と「奴隸」(δοῦλος)²⁴⁾の対比も、ローマ皇帝が「第一人者」(princeps)と称されていたこととうまく符合する²⁵⁾。「と見なされている」という、迂言的な言い方は、ローマ帝国による支配を容認したくないという気持ちの現れであろう。「抑えつけ」と訳したκατακυριεύεινは「主人となる、制圧する」という意味である。すなわち、力の強い者が支配者として、主として権力を振るうことへの抵抗がここには込められている。

だからこそ、大いなる者、第一人者でありたいと望むことは否定される。そうではなく、むしろ仕える者、奴隸となるべきだとイエスは言う。この言葉は、「仕える者」(διάκονος)・「奴隸」(δοῦλος)という語が、それ自体否定的な意味を持つからこそ——誰も進んでそうになりたいなどとは思わないからこそ——衝撃的な力を持っているのである。それは、世のため人のための「奉仕」とは明らかに違う。masterであることは否定され、誰も望まないこと、誰も進んで出来そうにないことを、敢えてイエスは命じている。そこにこの言葉の真の緊張感がある。

ただし、「仕える者、奴隸になれ」というこの命令には、「あなたがたの中

23) 口語訳・新共同訳では「異邦人の間では」と訳しているが、ἐθνῶν (ἔθνοςの複数属格) はむしろ「諸民族」と訳されるべきである。ここに、「ユダヤ人⇔異邦人」の対比を見て取る必要はない。

24) ギリシャ語のδοῦλοςは「しもべ」とも「奴隸」とも訳し得るが、この場合は後者の方が適切である。

25) 荒井献『イエスとその時代』(岩波新書、1974年) 174-175頁によればさらに、43節の「大いなる者」(μέγας) も、皇帝が元老院議員よりも「大いなる」権限を掌握していたことを暗示している可能性があるという。

では」という留保が付けられている。すなわちこの言葉は、二つの領域の区別を前提している。一つは、イエスを中心とする共同体、もう一つはその外の社会である。そして、イエスのこの命令は、前者、すなわち共同体の内部で通用する倫理として提示されているのである——共同体外部の一般社会では、力ある者が支配し、権力をふるっている。しかし、あなたがたの中ではそうではない。あなたたちの中では、偉大な者でありたいと望む者は、仕える者となり、第一人者でありたいと願う者は、万人の奴隷となれ。

この留保はおそらく、イエスの言葉を教会内部の倫理に限定するための二次的な付加であろう。「万人の奴隷」という言い方は、特定の集団を前提しておらず、「あなたがたの中では」という留保はそれと矛盾している²⁶⁾。イエス死後のキリスト教徒たちは、実行不可能とも思えるイエスの言葉を、実行可能な教会内倫理へと和らげるために、この句を付加したのである。

他方、Mastery for Serviceという標語は、学校内でのみ通用する「あなたがたの間」の倫理ではなく、学校の外の一般社会でも通用する倫理として掲げられている。だが、そのためには「主となるな、奴隷となれ」では都合が悪い。学校の「標語」となるためには、立身出世を頭から否定することもできないし、奴隷という社会身分になることを勧めることもできない。「奴隷」という存在を現実知っている人ほどそこに抵抗を覚えるはずである。それゆえ、「奴隷になれ」ではなく、主になれ、しかしそれは自分の欲得のためではなく、公共の利益のため、社会「奉仕」のためでなければならない。そのようにイエスの言葉を和らげる形で解釈したのがMastery for Serviceだと言えよう。

Mastery for Serviceは結局、強者が弱者を支配することを批判し、奴隷となれと命じる、イエスの強烈な宣言を、「自らの主」となり「奉仕」せよという意味に取る、それ自体、一つの——必ずしもイエス自身の意図に沿っ

26) 類似の言葉を伝える（おそらく同根の伝承）マルコ9：35およびルカ22：26ではこのような留保が付されていない、という事実も、「あなたがたの中では」という留保が二次的な付加である可能性を支持する。

ているとは言い難い——聖書解釈なのである。

結論

「奉仕のための練達」という訳語は、Mastery for Serviceの訳語として、1950年代前半から使われるようになってきた。しかし、Mastery for Serviceというモットーが本来持っている「主人であること」と「仕える者であること」の対比関係、すなわち、主人となれ、しかしそれは仕える者になるためだという逆説的主張をうまく言い表せてはいない。この訳語が出てきた当初は、その対比関係がまだ意識されていた。しかし、訳語自体にそのような意味合いが含まれていないため、次第にそのことは背景へと退く結果となり、「社会奉仕のために勉強しよう」というような平板な意味に理解されることが多くなった。

Mastery for Serviceが本来持っている意味をより明確に示すためには、「奉仕のための練達」よりもむしろ、「仕える主人」といったような表現の方が訳語としてはよりふさわしいように思われる。どのような訳語を用いるにせよ、このモットーには、支配者・主人となることの意味を根本から問い直させる働きのあることが今一度想起されるべきである。その際、このモットーの背後には、支配者たることを徹底して否定し、むしろ奴隷であれと命じるイエスの主張があることも、併せて記憶される必要があるように思う²⁷⁾。

(筆者は関西学院大学商学部助教授)

27) 本稿執筆のための資料収集に際して、関西学院学院史編纂室の方々より多大な助力を賜った。心より感謝申し上げる。